

『性』の話【前篇】

『性（さが・せい・しょう）』という言葉が表すのは、たとえば“性善説”など「人間が生まれながらに持っているもの」という意味、または「人の性分」という表現、“心配性”や“貧乏性”などでも使います。

あるいは「ものの性質」たとえば“アルカリ性”とか“酸性”とか言いますよね。

いろいろ使われる『性』ですが、話題として注目されることが多いのは、男性とか女性とか「性別」にかかわる問題に登場する『性』ではないでしょうか。

先日も20代の女性からご質問をいただきました。どうしてカウンセラーには女性が多いのか？と訊かれました。私は答え慣れてしまっているのですが、大概二つの要因があるのではないかと思います。

カウンセラーを職業として考えると、常勤職が少なく、また、長い時間と費用をかけて資格を取っても仕事として成り立たせていくには能力や環境などによっても差が出てしまうため、安定が約束された職業とは言えないところがあります。

私の個人的な印象ですが、男性のカウンセラーさんというと、別の本業や収入源を持たれて、カウンセリング的なことはスキルとして学び実践されている男性の方が多いように思います。

現在国家資格化が決まっており、近々法律として施行されますので、今後は職業としての状況も変わるのかもしれませんが。

15年くらい前でしょうか、『話を聞かない男と地図の読めない女』という本が売れたことがありました。脳の構造の違いみたいな説明だったかと記憶していますが、信憑性はさておき、「男性は話を聞かない」というイメージが多くの人で共有されているのだとすれば、カウンセラーを目指そうと考える男性は少なく、また、男性のカウンセラーにお話しをしようというクライアントさんも少なくなってしまうのかもしれないですね（苦笑）

もちろん、それが全てとは考えませんが、少数ながら「話のききかたを教えてほしい」と私のところに通われる男性がいらっしゃることも事実です。

妻や子どもや部下のためと仰って、仕事帰りや休日に“話の聞き方教室”のようなことでわざわざ労力を割かれる男性に、私は敬意を表さずにはいられませんが、同時にそれくらいその男性たちには「話を聞く」ということが難しいものなのだと感じます。

先のご質問をいただいた20代の女性は、逆に女性のカウンセラーにはあまり良いイメージが無いとのことでした。

まあ、おそらく男女比で言えば、3：7くらいでしょうから、カウンセラーに会えば圧倒的に女性に当たる確率が高いわけで、そうすると、相性の良い人にあたるとも、合わない相手にあたるとも可能性は男性よりもずっと高くなるので、たまたま相性のよろしくない方に当たってしまったのではないかとも思うのですが、何とも言えませんでした。

お医者さんや学校の担任などにも「女性の先生が良い」とご希望される方はよくありますね。やはり優しいイメージや、受け止めてもらえる感じは男性よりも女性にあるように思います。男性は強いとか、厳しい、怖いという印象が先入観として多く存在しているとも思います。

しかし、このような、男性はこう、女性はこう、というようなイメージは時代とともに変化をしています。

或いは、様々な『性』の在り方を主張し、LGBTという言葉もよくみかけるようになりました。日本の社会も多様性を広げ、決めつけや固定観念をなくそうと動いているようです。

カウンセリングの仕事をしているとこのような『性』について深く考えさせられることが沢山あります。

たとえば、生来その方に備わっていた『性』と人生を生きる上での『性』質がうまくかみ合わない人たちとお会いしています。ある10代後半の女の子は自分のことを「ぼく」と名乗り、親御さんがつけた名前とは別に男性名を考えていました。そしていつか経済的に独立できた

ときに身体と戸籍名を変えることを夢として語っておられました。

とても重要で繊細な問題なのですが性同一性障害の方は生きるか死ぬかのレベルの問題に苦しんでおられることが多いです。だからこちらでも真剣に取り合わねばなりません、つい、「性同一性障害だから…」という善意からの決めつけをしてしまいそうになります。内側と外側の『性』が違っていただけだから治療すれば楽になれるのではないかということが頭をよぎります。

結論から申しますと、三年後に彼女は「ぼく」から「わたし」にもどっていました。



発行

本山社会保険労務士事務所

東京都杉並区成田東5-39-11-401

発行年月日 平成28年11月

*筆者は現在クリニックでカウンセラーをしています。仕事の関係上氏名の公表は控えさせていただきます。